国際センター

2024 年度　国際交流活動報告

国際センター　早野曜子

国際センターは「自由学園を世界に、世界の課題をキャンパスに」という標語のもと２０１６年に発足した。　多文化共生時代を生きる次世代の育成として「一環教育を生かした外国語教育の充実」「教室の国際化」「海外留学の促進」「海外の学校との連携」「世界の課題の学習」の５つを柱に国際交流プログラムを推進してきた。

2024 年度は、男女別学から共学へと移行し、中等部・高等部の生徒には大きな変化の時となった。その中で形を変えながらも、これまで継続してきた海外との交流を実行するとともに、これからの課題も見えてきた1年であった。2024 年度に実施した国際交流プログラムについて報告する

Ⅰ　学校間交流

1　フィンランド留学生受け入れ

期間　5 月 4 日(金)-5 月 17 日(金)

生徒　Ruut Rantalahti, Sylvia Perälä,Janna-Juulia Mäenpää, Laura Jokiaho，合計 4 名

高等部2年が受け入れ担当学年となり、学校でのバディ生徒をきめ、バディが選択した授業に一緒に参加した。4 名はホストファミリー宅に滞在し、生徒と一緒に通学した。片道 1 時間掛かる生徒もいたが、日本ならではの体験となったようだ。英語・保健・体操・数学などの授業参加のほかに農芸、習字、茶道の体験や、初等部との交流なども行った。

Janna-Juulia は棒高跳びの選手で滞在中は転回部の練習にも参加して中等部の生徒とも交流できた。今年度から高等部の生徒は時間割が選択制になった為授業の組み方に課題はあったが、初等部6年生との交流など、高等部以外の生徒とも交流できたことはお互い貴重な体験となった。

茶道体験

初等部で発表

堆肥づくり

農芸（花束つくり）

2　米国マスターズスクール来校交流

期間　6 月 13 日(木)-6 月 15 日(土)

生徒 14 名、教師 3 名が来校。マスターズスクールには 2023 年 3 月に自由学園生徒 4 名が留学し、交換交流として来校した。6 月 13 日は夕方学園に到着し、各寮へ移動。翌 6 月 14 日(金)は1・2時間目は化学、3・4時間目は生活経営実習で梅干し作りを体験した。午後は生徒によるキャンパス案内、6 時間目は英語コミュニケーションの授業で習字を行った。生徒は東天寮 5 名・清風寮 9 名に宿泊し、寮生活も体験した。前年3月に留学した生徒が寮担当として対応した。当初は高3クラスのみでの受け入れを検討していたが、縦割りクラス・高2クラスにも幅を広げたことで多くの生徒と関わることができた。

Japanese Culture 体験

バディと東京見学

3 ポーランド ポメラニアン大学との交流

① ポーランド研修

期間 6 月 2 日-6 月 16 日
最高学部学生 8 名 引率 1 名 合計 9 名
今回で3回目の研修旅行となった。(P.94参照)

② ERASMUS＋による教員間交流

期間 10 月 28 日～11 月 1 日

エラスムス＋(EU の教育交流事業)の一環として Małgorzata 教授が来校し特別講義を実施した。教授は英語教授法の専門で学部1,2 年の英語、後期課程のヒューマンゼミで講義を担当された。

ヒューマンゼミでの様子

③ ポメラニアン大学学生来校交流

期間 2024 年 11 月 21 日―28 日
来校者 学生 6 名と教師 2 名

ポメラニアン大学とは 2016 年から交流が始まり、学校間協定が締結されている。6 月に最高学部から 8 名の学生が訪問している。ポメラニアン大学の学生は学部寮に滞在し、最高学部 1･2 年の英語や体操の講義に参加したり、週末に浅草、東京国立博物館などの日本観光、寮生でのパーティーなど、様々な側面から日本文化を体感し密度の濃い1週間を過ごした。11 月 23 日には黎花祭･JIYU1123 にも参加した。学生の受け入れは、6 月にポーランドを訪問した学部生が中心となり行った。ポーランド学生は「食事はとても美味しく、可愛い上に安い商品が多く、何より日本人の親切さに驚いた」と話し、学部生は彼らを通して日本の良さを発見するなど、双方の学び多く友情を深める期間となった。

学生紹介

1123 の見学

交流した学生たちと

Ⅱ派遣プログラム

1　英国 Cheltenham Ladies College 短期留学

期間 6 月 20 日―7 月 6 日
高等部2年　山神ひかり　高等部3年　金丸実由

2018 年から交流のある CLC に女子 2 名が留学。初めての留学となった。2 名は CLC の高橋弥生先生の日本語をとっている生徒がバディとなり、哲学やフランス語など日本で経験のない授業にも参加した。授業とは双方向の対話であることに気がついたなど異なる学校体験で様々な気づきがあった。

シェークスピアの野外劇を鑑賞

日本語クラスに参加

2．フィンランド短期留学

期間 8 月 15 日(木)-8 月 30 日(金)
高等部2年　ダンロップ ジョシュア　綱島遼　黒沢夏未
　　石田礼歩
高等部3年　出口七帆　谷崎加納子　　合計 6 名

ホストファミリーと湖へ

フィンランドのゲーム

日本のプレゼンテーション　　留学生と一緒に

Vimpeli 高校の授業、数学・物理・体育・フィンランド語などに参加。滞在中はホストファミリーと一緒に Vimpeli 高校に通い、1 日 Alajärvi 高校を訪問交流した。フィンランド野球の発祥地である Vimpeli で野球の試合を観戦したり、平日学校が終わった後、湖に行ってボートを漕いだりなど、生徒は、自然豊かな日常生活を実感し、ワイフワークバランスが取れていることを痛感した」と感想で話した。
これまで Vimpeli からの帰路ヘルシンキまで生徒だけでの移動ということがわかり、急遽出発 2 日前に、フィンランドとオンラインで繋ぎ Juha-Pekka 先生から空港までの行き方について保護者へ説明していただいた。2025年から Vaasa まで行くことに変更した。

Ⅲ 研修プログラム

1　カンボジア研修

期間　7 月 24 日-8 月 1 日
生徒 11 名（高19名　高21名　高31名）
引率 2 名　現地スタッフ 2 名

この研修はカンボジアの都市部と地方の生活を体験し、豊かさとは何か、幸せとは何かを考えること。カンボジアの歴史を学び、未来に向けてどのように平和を構築していかれるかを考える。多様な人との出会いと交流を通し、他者理解、尊重心を育むことを目的に 2017 年から実施している。

小学校での交流の様子

アンコールワット遺跡見学

現地では、キリングフィールド博物館見学,アンコールワット遺跡見学,FLO 福祉施設訪問し子どもたちとの交流、食事作りや小学校でのボランティア活動など行った。

今年度は同学年だけではなく、縦割りのメンバーでの研修となりそれぞれに役割を決めて学年を超えた学びがあった。また現地の方々に協力をいただきホームステイ、授業実践を実現することができた。異言語、異文化に触れ、自分たちの学びを伝える実践になり学校間にとってもいい機会となった。現地では、英語を通したコミュニケーションだったため英語の語学勉強にモチベーションがあがった生徒も多くいた。

2　最高学部ネパールワークキャンプ

期間　8 月 1 日-21 日
参加学生 13 名　引率 3 名　合計 16 名
詳細はP.84参照

3　ネパール見学ツアー

期間　8月10日ー20日
参加者　生徒7名　保護者・卒業生・教職員 6 名　計 13 名

これまで最高学部が実施してきた植林活動現場の見学や 35 周年のイベントへ参加した。参加した生徒は「人々が笑顔で過ごす様子から、物質面の豊かさでなく心の豊かさを実感した」との感想であった。

35 周年のイベント　　植林地見学

4　デンマーク研修

期間　8 月 15 日-8 月 30 日

参加者　高等部2年 11 名　保護者 2 名　引率1名　計 14 名

研修前半はオレロップ体育アカデミーに滞在しながら幼稚園・小学校の見学やケアホームの訪問した。8 月 23 日には 100%　自然エネルギー利用の Ærø 島を訪問し、太陽光パネルや風力発電施設を見学し、環境問題への理解を深めた。また小規模農場を訪問しデンマークの産業と生活を学んだ。

後半は、コペンハーゲンから 40 分に位置する Allerød 高校を訪問し、生徒はホームステイを体験した。同世代との交流は、言語を超えて共通する話題への共感など、共通の英語を通じて、理解を深めることができた。

風力発電所見学　　農場見学　　サイクリング

小学校の朝礼に参加　　オレロップケアホーム訪問

アレロッド高校生と　　学校でのお別れ会

Ⅳ 英語ティーチング・アシスタント

① 期間　4 月 10 日―7 月 19 日

James Hunter（Winchester College）

Ellie Garbutt（Teddington School）

初等部での様子　　放課後の ESS（英会話）

James は日本近代史に興味があり、生徒とも積極的に交流した。Ellie はお母様が卒業生で、日本での滞在を希望しティーチング・アシスタントを体験。学部生徒も親しくなり、帰国後も交流を続けている。学部の生活経営実習に参加し、桜の塩漬けや、筍ほりなども体験した。

② 期間　9 月 19 日-12 月 23 日

Chiang Jade　（Cheltenham Ladies College）

Darby Stradford　（Cheltenham Ladies College）

英語での挨拶（9 月）最後のスピーチ日本語　12 月

2018 年から交流のある、イギリスの CLC 卒業生 2 名が滞在。幼児生活団から最高学部までの英語の授業をサポートした。光風寮に滞在し、寮生や学部 1 年の生徒とも親しく交流できた。

Ⅴ オレロップ体育アカデミーとの交流

① 学校間協定の締結延長調印

5 月 20 日にトマス校長・クリスティアーネ INTAC 担当が来校し、学校間協定の締結延長に承認した。オレロップ体育アカデミーとは 1931 年から交流が続いている。Teaching Abroad としてオレロップ卒業生招聘プログラム、オレロップ奨学金による最高学部学生の留学プログラム。教員間交流の協定書を延長調印した。

② デンマーク体操 TA 来校

期間　8 月 30 日-12 月 23 日

Ida Thyregod ,Oliver Haubjerg　の 2 名が来日

9 月 1 日より、高等部の体操指導および最高学部の体操指導を実施。10 月 12 日の体操会では、高等部徒手体操,クラブ体操,最高学部全員体操の振り付け指導を行った。体操会後は、幼児生活団・初等部・中等部・高等部・最高学部での体操指導のほか、福岡・北九州・西宮・姫路・仙台・

北上の友の会主催デンマーク体操ワークショップで体操指導を行った。

Ida（22 歳）　Oliver（20 歳）

体操会に向けて指導

幼児生活団の指導

日本体操祭に参加

地方友の会での講習

12 月 15 日には最高学部学生と日本体操祭にも参加出演した。両名とも最高学部の寮に滞在し、オレロップで同期だった学部生をはじめ、学生たちと活発な交流ができた。

Ⅵ その他

1 ハンガリー合唱団来校

9 月 2 日、ハンガリーのヴェスプレーム市地域合唱団が来校。14 歳から 20 歳の混声合唱団で、音楽教師の関係で来校が決定。中等部・高等部の始業式後、日本の歌とハンガリー語の歌と踊りを披露した。その後幼児生活団での演奏やコーラス部との交流など行った。

中高始業式にて歌の披露

生活団での歌と踊り

2 デンマーク　BøvlingIdeæt 体操チーム来校

10 月 12 日　デンマークの Bøvling Idrætsefterskole（ボーリング体育学校）の卒業生チームが体操会のゲストチームとして演技発表を行った。メンバーは 17 歳―23 歳の男女各 14 名の計28名であった。ボーリング体育学校はユラン半島に位置する、9 年生・10 年生（15-16 歳）を対象とした全寮制の学校で、体操を必修科目としている。自由学園にはこれまで過去 3 回（1984,2005,2016）来校し、演技発表を行っているが、体操会での演技発表は今回が初めてであった。ミニトランポリン・エアトラックを使ったダイナミックなタンブリングの他、男女の徒手体操などを発表した。

演技の様子

体操会当日だけの来校だったため、演技発表を通しての交流のみとなったが、生徒たちは、体操会に向けて体操練習に励んでいたこともあり、同年代の演技発表に共感と称賛を持って体操を楽しんでいた。

3 デンマーク Alme Skole 来校交流

期間　2024 年 11 月 19 日（火）

生徒 23 名　引率 2 名が来校し、中等部 3 年生と交流の時を持った。アルメスコーレは 2 年続けての交流となった。お昼前に来校し昼食後はお習字やゲームなどで交流した。

正門での歓迎

書道の体験

日本の遊び体験

交流を終えて

手作り福笑い

お習字を体験

オニごっこ

集合写真

4　デンマーク歌の文化交流　ワークショップ実施

日時　2025 年 1 月 28 日

最高学部でデンマーク語の講師を務めるリセ・スコウ先生の紹介で、最高学部を会場にデンマーク大使館主催「Singalong」に、高等部・最高学部生まで 110 名余りが参加した。デンマークの思想家であるグルントヴィの自由や平等、自然についての詩にメロディをつけたのが、ソングブックの始まりとされる。

デンマークのミュージシャンとオンラインで繋がり、一緒に歌いながら、フォルケホイスコーレで歌い継がれているソングブックの歴史を通し、デンマークの歌の文化、一緒に歌う意義について考えるひとときとなった。

ソングブック

オンラインで合唱

5　デンマーク　Højer Efterskole 来校交流

期間　2025 年 2 月 14 日(金)

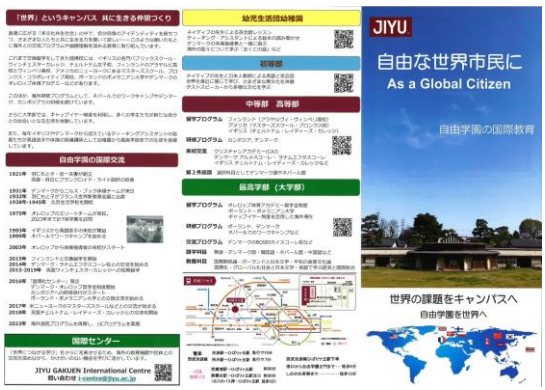
来校者　生徒 34 名,引率 4 名の合計 38 名が高等部1年生と交流をした。ヘーヤーエフタスコーレは 14―17 歳の生徒が 1 年間通う全寮制の学校で、柔術や日本語の授業を行なっている。日本への修学旅行は今回が初めてであった。一行は 11 時すぎに来校し、グループに分かれて学校案内を済ませ、昼食後は生徒が交流プログラムを考え、鬼ごっこ、お習字、福笑いなどの遊びを通して交流をした。受け入れ担当の生徒は「準備期間が短かったが、皆楽しく交流できてよかった」と感想であった。

引率のマティアス先生は、生徒が主体的にプログラムを考え行っている様子を見て、全てが学びになっていること、自然に恵まれた環境で心地よく過ごせることに感心したとの感想であった。解散にも参加し 4 時過ぎに学園を後にした。天気に恵まれ、笑顔あふれる 1 日となった。

6　国際理解教育リーフレット作成・ポスター掲示

幼児生活団から最高学部までの自由学園の国際理解教育がわかるリーフレットを作成。全校へ配布した。英語 TA による幼児生活団での読み聞かせや、デンマーク体操 TA の生活団の体操指導など、一環教育の特徴をまとめた。

https://www.jiyu.ac.jp/blog/intl/87412



リーフレット

正門前ポスターの掲示

通学する生徒、来校される保護者・見学者に学園の国際交流の様子がわかるポスターを作成し正門横に掲示した。

まとめ

2024年度は国際交流として 20 プログラムを実施した。自由学園の土台であるキリスト教に根差した「自由・協力・愛のある社会」の実現の目標に向かい、生徒・学生は今いる社会の価値観だけでなく、多様な人が異なる文化や価値

観を持って暮らしていることを体験を通して学ぶことができたのではないか。
海外留学や研修は体験する本人にとりかけがえのない経験となる。同時に海外から来校する学校との交流は、交流学年や他の生徒にも他者とふれあう機会となる。今年度実施された 1 日来校交流は生徒主体でプログラムが実践され、生徒たちには、言語によるコミュニケーションの大切さや、交流の達成感を感じることができたのは成果であった。今後の課題として日本の文化を伝えるだけでなく、共通する社会課題などを共に考えるプログラムの実施も必要ではないか。
共学化1年目の今年、男女が協力して交流プログラムを考えたり、海外研修でも仲良くプレゼンテーションを進めるなど、共学化による効果が見られた。マスターズスクールの Fish 先生からは、以前に比べて英語でコミュニケーションを取ろうとする生徒が増えたとの感想もいただいた。学内の改変に向け、男女生徒が普段一緒に生活していない人に自分の考えを伝える機会が増えたこともその要因の一つとなったのではないか。
　2024年度は特にポーランドのポメラニアン大学と学生だけでなく、教員の相互交流も実現できた。詳しくは「ポーランド報告」に譲るが、こうした相互交流を継続するには、人と人との信頼関係に基づく、いきた交流が不可欠である。
多様化する価値観や、自国優先の経済社会になりつつある中、生きた身体で他者とかかわり、互いの価値観を尊重しつつ共に生きる社会「平和を紡ぎ出す人」の育成に努めていきたい。

参考資料
自由学園国際交流史は年報 23・25 号に掲載
https://www.jiyu.ac.jp/documents/annual_report.php
その他国際センターの活動については学園 HP に掲載
https://www.jiyu.ac.jp/blog/category/intl